

# 國學院大學學術情報リポジトリ

Shuheï Aoki, Collected works of Aoki Shuheï vol.1  
literary studies on Kojiki

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kanda, Norishiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000148">https://doi.org/10.57529/00000148</a>

〔紹介〕

青木周平著 『青木周平著作集 上巻 古事記の文学研究』

神田典城

青木周平氏は、昭和二七年三月の生まれ。存命であれば今頃は六〇代前半に差し掛かり、これからいよいよ斯界の重鎮としてその存在感を示す頃合いとなっていた筈だが、惜しいことに平成二〇年の十一月、忽然とこの世を去ってしまった。享年五六歳。平均寿命が八〇歳にも至り百歳を超えるのも不思議でなくなった昨今、あまりにも早い逝去であった。

いま、「これからいよいよ斯界の重鎮……」と記したばかりだが、実のところを言えば、青木氏は五〇代にしてすでに重鎮の風格を漂わせていた。それは「拳措動作が尊大だ」とか「体格がいい」だのというような些末卑小なことではなく、内から

滲み出てくる風格のようなものを漂わせていたというべきだろう。それは何よりも地に足の着いた髓かな学問と、謙虚な態度、そしておおらかな人柄と細やかな心配り、それらが相俟って醸していたものと言える。

実際、氏は学界では活動の重心を古事記学会と上代文学会に置いていたわけだが、いずれの学会でもその存在感は大きなものがあり、青木氏の発言の重みは他に代えがたいものであり、周囲の者が自ずとリーダーとして仰ぐ存在となっていた。

さて、その青木氏の著作集である。氏は國學院大學から大学院、ついで同大助手を経て、専任教員として教育・研究活動の

経歴を進めて来た。いま、目安として大学院からを研究の実働期間としてみると三四年、昭和五十一年の本誌掲載の処女論文『青木周平先生追悼 古代文芸論叢』所収の業績(一覧による)からとすれば三二年間の青木氏の足跡が網羅されている。そして本著作集の編集は、当然のことながら氏の教え子達が手掛けしており、本稿の対象となる「上巻」を谷口雅博國學院大學准教授、「中巻」を倉住薫大妻女子大学専任講師、「下巻」を渡邊卓國學院大學助教の三氏が分担している。

ところで、氏には論文を集成した既刊が二冊(『古事記研究—歌と神話の文学的表現』、『古代文学の歌と説話』)存在するのだが本集の編集にあたっては、既刊本を一旦解体したうえで、未収録の論考と併せてあらためてテーマ別に再構成している。

編集に当たった方々が大変なご苦労だったことは言うまでもないだろうが、その努力のおかげで大変に見通しの良い著作集が出来上がったと思う。「上巻」を対象とした本稿に取り掛かっている今(平成二十七年十一月)、すでに「中巻」が十一月十一日の氏の命日を期して刊行が成っている。両書を目にして右記の思いを一層強くしたところでもある。

ここであらためて全三巻のタイトルを紹介しておこう。

上巻 古事記の文学研究

中巻 古代の歌と散文の研究

下巻 古代文献の受容史研究

実は上巻を眺めていつつ、右に記した通り、下巻一卷を受容史に当てようになるところに、青木氏の研究の真骨頂があることを思う。氏の論述の何よりも見るべき態度の一つに、先行研究の徹底した探索がある。例えば、国学者の論を取り上げるときちゃんと評価を下し、そこから時の最前線の論への評価に及ぶといった姿勢を疎かにすることがないといったかたちでそれはあらわれており、かかる受容史の確かな把握がそのような叙述を支えているということなのだろう。

氏はかつて、稿者が、この先行研究を網羅するあり方に感心しているという話をした折に、学界時評や古事記研究文献目録の仕事に多く携わっていたことにより、自然にたくさんの論文が頭に入るようになったのだと、さりげなく語ってくれたものだが、これは当たり前のように見えて、誰もが自然にできるようなものでもなからう。研究テーマや分析の対象は常に同じであるわけではない。たまたまその時に抱えている問題とリンクした論文に出会えば、それは意識の中に留まろうが、いくら多数の論に触れたとしても、そうでないものの方がは通り過

ぎてしまおうというものだ。蓄積されているということは、常に問題意識を高く持っていること、今は直接関係なくともいつか生かす時が来るという粘り強い意識の持続がなければならぬはずだ。それは資質もあるだろうが、その必要性を常に認識しているからこそ実現するはずのもので、その意味でまさに氏は真の研究者なのだと思う。

さてそれでは目次を引いて本巻の中身を瞥見してみよう。

第I編 古事記神話の世界観

第一章 記紀の比較—国を視点として—

第二章 『古事記』神話と『日本書紀』神話

第三章 大地の起源

第四章 天の起源

第五章 高天原の形成—天原から高天原へ—

第六章 葦原水穂国から葦原中国へ

第七章 『古事記』の神観念

第八章 『古事記』『日本書紀』における盟神探湯の意義

第II編 古事記の表現①—神々の世界—

第一章 古事記の表現

第二章 古事記神話における天神の位置

第三章 伊那那岐命と伊那那美命

第四章 「神生み」段の表現

第五章 伊那那美命化歳の表現

第六章 スサノヲの名義とウケヒの文脈

第七章 葦原中国平定伝承と「言向」

第III編 古事記の表現②—神と人—

第一章 神武記・高佐土野伝承の神話的性格

第二章 神武天皇成婚伝承と〈一宿婚〉

第三章 三輪神にみる〈国作り〉と〈神祭り〉の性格

第四章 倭成す大物主—記紀の比較を通して—

第五章 倭建命西征伝承の空間認識

第六章 倭建命東征伝承と「言拳」

第七章 ヤマトタケル説話—古事記の文学性の検証—

第IV編 古事記の表現③—会話文と歌—

第一章 古事記における会話文の性格

第二章 垂仁記・沙本毗賣物語における会話文の性格

第三章 雄略記・赤猪子物語における会話文の性格

第四章 赤猪子物語にみる〈老〉表現

第五章 履中記における歌の機能

第六章 会話文と仮名表記

これを一瞥しただけで、青木氏の守備範囲の広さが容易に想像できるといふものだろう。「古事記」はよく知られているように、上中下三巻のそれぞれに性格の違いがみられ、もちろんある一貫した構想の下にあるにしても、取り上げる方は、それぞれに得意な分野という偏りを生みがちである。

その点、青木氏の視界は目次に表れている通り、いわゆる序文から下巻まですべての巻をカバーしている。しかも、本著作集のうちの一巻（中巻）が「歌と散文」というタイトルであることにも氏の研究が、横断的であることが知られるところだが、本巻は古事記に関わる論文を集めたものであり、その意味では全体として散文研究という括りになるのだろうが、タイトルにも表れている通り、テーマには歌謡も含まれる。

この点について念のため説明しておく、「歌」をタイトルに含むのは第IV編第五章のみだが、実は第IV編第一章冒頭に次のようにある。

古事記に歌が存在する意味については、すでにさまざま  
な観点から論じられている。(中略) 筆者も(中略) 一つの  
視点として、歌と地の文の接続が、会話文などと同様の  
形式をもつという事実にも、もっと注目してよいのではない

かと考える。当たり前のことではあるが、歌が古事記にある第一の意味は、その会話性にあると思われる。(以下略) つまり、第IV編は全体が古事記における「歌」を解明するための論なのである。

本巻の編集を担当した谷口氏が解説で、この辺りのことについて端的に述べているので、そこから言葉を借りてみよう。

先生の学問は非常に幅が広く、上代散文に留まらずに韻文分野も研究の対象としていた。韻文も、というよりも、散文研究と韻文研究とが一体のものとしてあったと言え

る。  
研究者とは所詮オタクであり、とかくタコツボ化しがちなものだが、ここまで述べて来れば、青木周平という研究者がいかに稀有な存在だったかがわかって。

ところで、紹介の文としては、ここから更に本書の内容に踏み込むべきかとは思ふ。しかしながら本書には、右に引いたところでもあるが、編集担当者の詳細・周到な各論の解説があり、稿者があらためて述べ立てるまでもなく、それをそのまま引き写してしまうのが最上と思われる。しかしそれではあまりに芸がない。そこで、稿者としては本書の意義について述べることに重点を置いてみたい。

本書に盛られた氏の研究成果自体が多くの示唆を含み、残された我々によるさらなる展開を待っているのは言うまでもない。と同時に、青木氏の警咳に触れる機会が永遠に失われた後進の人たちは特に、この書を通じて研究というもののあり方をこそ学ぶべきだろう。

すでに右に述べてきたことの繰り返しになるが、氏の研究態度の要諦は、広い視野と先行研究の博搜・咀嚼。そこから生み出される着実な論の展開と言うに尽きようか。

とりわけ、先行研究の博搜は後進の第一に見習うべきところであろう。実行するとなると手間暇のかかるものだが、そこを疎かにしないことが、論の慥かさを呼び込むのだと思う。それも、単に「引く」だけでなく、きちんと評価したうえでのことだ。他者の業績の評価はそれ自体力量を必要とするのだが、逆にそれを心がけることで、論を読み込む力が涵養されるというものだろう。是非本書を通じてそこを学び取ることを薦めたい。

氏は、研究者として有能だっただけでなく、組織の運営にも優れた手腕をみせていた。稿者は学会の運営などを通じてその姿を目の当たりにしていたわけだが、勤務先でもその力を発揮

して、研究プロジェクトの推進はもちろんの事、研究以外の仕事でも多忙を極めていたと聞いている。そのような中で、これだけの緻密な研究レベルを維持していたというのは、驚くべきことと言って良いだろう。

もちろん誰もが青木周平になれるわけでもないし、そのようなことを目指しても意味はない。しかし、研究の基本をしつかり持ち続けるという姿勢は学んで損はない。

(A5判、五〇四頁、おうふう、二〇一五年三月発行、定価一  
二〇〇〇円＋税)